

2015 年度別府大学夢米棚田活動報告会に参加して

大分県農林水産部審議監 渡辺 哲也

11月、12月の気温は平年を5℃も上回る異常な暖かさでしたが、冬野菜の生産に大きな影響が出ました。白菜やキャベツなど葉物野菜は、早く大きくなったため、年末までにほとんどが出荷され、年明けは店頭で並ぶ商品が少なくなり高騰しました。農業生産はどうしても天気に左右されるため、生産者はたいへん苦労されていますが、消費者も「品物が少なくなった。高く買えない。」と困っていました。

皆さんも、夢米棚田チームに参加し、お米や七島イを栽培するなかで、四季の変化や近年の異常気象を身近に感じるようになったのではないのでしょうか。田植えの時の土の粘りや水のぬくもり、草取りの時の暑さやたいへんさ、稲刈りの時のさわやかな風とわらやお米の匂いなど、みなさんの五感で、お米が土と水、太陽でできることを実感されたのではないかと思います。ちなみに、27年産の大分県のお米は、日照不足や9月、10月の低温、いもち病の発生等により、作柄を表す作況指数は「95」のやや不良となりましたが、棚田米は皆さんの取組のおかげで、たいへん美味しいお米となりました。ご苦労様でした。

2015年度の夢米棚田チーム活動報告会に参加させていただきましたが、角煮ライスバーガーの復活、棚田特産香り米を使った焼酎の開発、コメ輸出の可能性など、米をテーマとする内容が多かったと思います。皆さんが、いろんな角度からお米に真摯に向き合っていたいただき、ありがとうございました。

また、本年度から世界農業遺産体験学習（2単位）がスタートし、講義や現地学習会等を通じて、世界農業遺産について勉強していただくとともに、別府公園で行われた農林水産祭でのPR活動にも取り組んでいただきました。世界農業遺産の知名度はまだまだ低い現状にありますが、皆さんの取組のおかげで多くの方への周知ができていくものと期待しています。

さて、先般、福島県に農地の復興支援に行っている県職員の激励に行ってきました。津波による被害は、海辺にあったであろう松並木やそこ

で暮らしていたであろう家並みなど影も形もなく、何もない空間が広がっていました。それでも、堤防の再構築のためのクレーンや水田の再整備のための重機が入り、復興の動きが感じられました。しかし、福島第一原発に近く、いまだ放射線レベルが高く立ち入り禁止の地帯は、5年間全くの手つかずで、人や動・植物も含め生命の気配がなく、なんともいえない怖さを感じました。当たり前だった日々の暮らしや空気、水、そして土が、一瞬にして当たり前でなくなった光景を目の当たりにして、本来、あるべき自然や環境を守ることの重大さと、私たちの責務を痛感させられました。

翻って、世界農業遺産の国東半島宇佐地域を見ると、荘園時代から長い年月をかけて人と自然が仲良く暮らしながら守られてきた豊かな自然や生活空間が多く残っています。お米や椎茸、七島イなど生活の糧を得ながら自然を守っていくという、農業と自然が循環する仕組みは、ぜひ将来に残しておきたいものです。

社会人となる前の貴重な4年間の学生生活の中で、夢米棚田プロジェクトに参加いただいたことを心からお礼申し上げます。この活動を通じて得られた経験や仲間は、皆さんの人生に必ずプラスになるものと思います。これからも応援をよろしくお願いします。